大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

小児看護学実習における学生の満足感に及ぼす要因(人文社会科学系)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大森, 裕子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010824

大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要，Vol. 8, p.73-77, 2002
Bulletin of Osaka Prefecture College of Health Sciences

報　告

小児看護学実習における学生の満足感に及ぼす要因

大森裕子

(大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科)

The Students' Satisfactory Factor in Clinical Practice of Child Nursing

Hiroko Ohmori

(Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Health Sciences)

Key words: 満足感; 小児看護学実習; 看護学生

はじめに

少子･核家族化が定着し，現代の若者は，兄弟の少ない，親類や近所付き合いの希薄な中で育ってきている。そのことが，子どもとの付き合いを不慣れにしている[1]。大阪府立看護大学医療技術短期大学部 (以下，本学) 看護学科の学生もまた，20年前の学生と比較すると，子どもとの接触経験の量が少なくなり，その内容も保育技術を要さないものが増えている[2]。それゆえ学生にとって，小児看護学実習 (以下，実習) で，子どもと親密に関わることや，子どものことを考えることは貴重な機会であるといえる。そして，それらから得られた満足感は，子どもへの興味や関心を深めると考えられる。また，学生にとって臨床実習における満足感や達成感は学習の動機付けとなり，ひいては職業観にも大きな影響を与える[3]といわれている。

実習では，子どもと子どもを取り巻く環境を理解し，看護を展開することを学習目標としている。そして，実習終了時には学習目標を達成し，同時に学生自身が満足のいく実習になることが望まれる。しかし，現実には，子どもの一挙一動に翻弄され，その時々の自己の感情が実習全体の満足感に反映しているように思われる。つまり，単に子どもから話しかけられたり，遊びにのってくれたりしたことのみで満足し，反対に子どもにぐずられたり，拒否されたりしたことが満足感を低くしている。このように，実習の満足感に及ぼす要因は，学習目標の達成だけとは限らないように感じられる。

そこで，今回の研究は，今後の実習指導方法を検討するために，本学の小児看護学実習における学生の満足感に及ぼす要因を明らかにすることである。

本研究で，「実習の満足感」とは，個人の欲求の充足状態ととらえ，学生にとって実習の結果が好ましいと思われる感情と定義した。

研究対象および方法

対象者は，平成13年4～12月に小児看護学実習を終了した2年課程および3年課程の学生120名である。学生には研究の主旨を説明し，実習終了後に質問紙を配布した。5日間の留置期間の後，無記名にてポスト回収とした。

調査項目は，先行研究および学生からの事前の聞き取り調査結果から抽出し，筆者が作成した。内容は，実習における満足感，子どもとの接触経験，受け持ち患児の状況および実習に関する内容49項目である (表1)。[実習に関する内容]については，4段階評定法とし，「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の各回答に1～4点を与えた。満足感も同様に，「満足していない」から「大変満足している」の各回答に1～4点を与えて得点化し，他の調査項目とどのような関係があるのかを分析した。データ分析には統計ソフトSPSS ver.10.0を用いた。

紀要委員会注：本報告は，平成13年度大阪府立看護大学医療技術短期大学部学長指定研究補助金を用いてなされた研究成果の報告である。

(受付日2002年9月6日，受理日2002年12月4日)

表1 調査内容

・実習における満足感	
・子どもとの接触経験	
・受け持ち患児の状況	
年齢，疾患，患児の変更の有無，母子同室の有無，看護ケアの量，看護ケアの難易度	
・実習に関する内容	
教員・看護師との関係・指導	10 項目
・教員や看護師が一緒にケアを行ってくれた	
・教員や看護師は患児との関係をうまくとれるように工夫してくれた等	
子どもの理解・関係	8 項目
・患児がぐずっても受け入れて接することができた	
・患児の反応にあわせて関わることができた等	
家族の理解・関係	4 項目
・家族と会話ができ関わりが持てた	
・家族を含めたケアが重要であるとわかった等	
学生自身	7 項目
・実習中自分自身が健康に過ごすことができた	
・子どもに対する苦手意識が減った等	
事前学習	3 項目
・実習前に学習したことを活用しながら実習ができた等	
学習目標・看護過程	17 項目
・患児と接する中から自分の目で情報を得ることができた	
・患児への理解を深め，個別性を考えながら実習ができた等	

結　　果

57名の学生より回答を得，回収率は47.5%であった。

1. 子どもとの接触経験

実習実施以前における学生の子どもとの接触経験については，「よくある」が22.8%，「たまにある」が36.8%で，約40%の学生が子どもとほとんど関わったことがない状況で実習に臨んでいた (表2)。

2. 受け持ち患児の状況

受け持ち患児は，幼児期が最も多く60%近くを占めた。家族の付き添いがあったのが38.6%であった。受け持ち患児に対する看護ケアの量，難易度は，共に「適当」が64.9%であった。実習期間中に受け持ち患児が変更し，2名以上受け持ったものが47.4%であった (表3)。

3. 実習における満足感

実習を終えてどの程度満足しているかの問いには，「大変満足している」が12.3%，「満足している」が57.9%であった。約70%の学生が満足感を得ていた (表4)。

表2 子どもとの接触経験

よくある	13	(22.8)
たまにある	21	(36.8)
ほとんどない	19	(33.4)
まったくない	4	(7.0)

n=57，(%)

4. 満足感と子どもとの接触経験および受け持ち患児の状況との関係

学生の満足感と子どもとの接触経験，受け持ち患児の状況との相関をみたが，有意な関係はみられなかった。

5. 満足感と実習に関する内容との関係

実習に関する内容49項目と満足感との相関をみた結果，有意な相関が認められたものを表5に示した。事前学習に関係した2項目『疾患に関する勉強不足のまま実習を行った』，『発達に関する勉強不足のまま実習を行った』と満足感との間には，有意な負の相関が認められた。『実習前に学習したことを活用しながら実習ができた』とは，

表3 受け持ち患者の状況

患児の発達段階			
	乳児	11	(19.3)
	幼児前半	20	(35.1)
	幼児後半	12	(21.1)
	学童	12	(21.1)
	思春期	1	(1.7)
	不明	1	(1.7)
家族の付き添い			
	あり	22	(38.6)
	なし	35	(61.4)
患児の変更			
	あり	27	(47.4)
	なし	30	(52.6)
看護ケアの量			
	多い	8	(14.0)
	適当	37	(64.9)
	少ない	12	(21.1)
看護ケアの難易度			
	難しい	13	(22.8)
	適当	37	(64.9)
	易しい	6	(10.5)
	不明	1	(1.8)

n=57, (%)

表4 実習における満足感

大変満足している	7	(12.3)
満足している	33	(57.9)
あまり満足していない	16	(28.1)
満足していない	1	(1.7)

n=57, (%)

有意な正の相関が認められた。看護過程に関する項目では,『患児と接する中から自分の目で情報を得ることができた』,『一般論をふまえた上で個別的な発達を見ていくことができた』等の情報収集の4項目とは，有意な正の相関が認められた。また『患児への理解を深め，個別性を考えながら実習ができた』,『受け持ち患児へのケアを計画し，実施できた』,『ケアの計画・実施に対する評価ができた』等の計画立案・看護実践・評価の5項目との間には，有意な正の相関が認められた。『教員や看護師は学生の必要に応じてアドバイス・指導・説明をしてくれた』,『教員や看護師は一緒にケアを行ってくれた』,『教員や看護師は患児との関係をとれるように工夫してくれた』,『教員や看護師の子どもに対する態度から学ぶ機会が多かった』等の教員や看護師との関係や指導に関係した7項目との間には，有意な正の相関が認められた。さらに，当初最も関係していると考えていた『患児の反応にあわせて関わることができた』,『子どもと非言語的コミュニケーションがとれた』といった「子どもの理解・関係」に関する項目との間には有意な相関は認められなかった。

考　　察

今回の調査で，小児看護学実習における満足感の要因を分析した結果，事前学習，看護過程の展開，教員･看護師との関係・指導との間に有意な関係が認められた。

看護学実習とは，あらゆる看護の場において，各看護学の講義，演習より得た科学的知識，技術を実際の患者・クライエントを対象に実践し，既存の理論，知識，技術を統合，深化，検証するとともに，看護の社会的価値を顕彰する授業である[3]。そのため，学生は実習に臨む前に，受け持ち患児の看護を展開するための必要な知識，技術の再確認が要求される。今回の結果においても事前に『疾患や発達の勉強』をし，『学習したことを活用した』ことで満足感を得ていた。学生は，既存の知識や技術を受け持ち患児のケアで実際に提供でき，目の前の現象と知識がつながったとき，満足を得るのであろう。実際に事前学習が不十分な学生は，実習が始まってから後追いの学習をすることになり，看護過程の展開も遅れ，実習期間内に学習目標に達しないことが多い。先行研究では，満足感と事前学習の関係を調査したものが皆無のため，比較検討するものがないが，今回の結果から，事前学習の重要性が示唆された。そして，事前学習は，学生の自主性にゆだねられる側面が大きいが，その重要性から考えると，実習前のオリエンテーション(本学は前週)の時点から，教員の積極的な関わりが必要といえよう。

また,『自分の目で情報を得た』,『個別性を考えながら実習ができた』,『ケアの計画･実施に対する評価』,『評価を生かせた』といった看護ケアを行うために必要なプロセスを展開することで満足していた。まさしく，満足感には，学習目標の達成が影響しているといえる。これは，桑野ら[4]や山口ら[5]の結果と同様といえる。したがって，実習がなんとなくうまくいったという感覚で終らせず，認知面での理解を深めさせることが大切であろう。そこで，日々の記録やカンファレンス等の場面で行ったケアの振り返りや意味を考えさせることが論理的思考を助けると思われる。

さらに，教員・看護師との関係や指導も満足感に影響を与えていた。先行研究では，教員･看護師の直接的指導が満足感に影響を及ぼしている結果はなかった。むしろ，

表5 実習の満足感と有意な相関が認められた実習に関する項目

事前学習に関する項目	相関係数
・ 疾患に関する勉強不足のまま実習を行った	-.346**
・ 発達に関する勉強不足のまま実習を行った	-.462**
・ 実習前に学習したことを活用しながら実習ができた	.303*
看護過程に関する項目	
情報収集	
・ 患児と接する中から自分の目で情報を得ることができた	.275*
・ 医師やプライマリー看護師から情報を得ることができた	.309*
・ 一般論をふまえた上で個別的な発達を見ていくことができた	.280*
・ 情報をまとめることができ，情報間のつながりも考えることができた	.279*
計画立案・看護実践・評価	
・ 遊びの中に発達を促す要素を取り入れることができた	.299*
・ 患児への理解を深め，個別性を考えながら実習ができた	.433**
・ 受け持ち患児へのケアを計画し，実施できた	.294*
・ ケアの計画・実施に対する評価ができた	.264*
・ 評価を生かして実習ができた	.297*
教員・看護師との関係、指導に関する項目	
・ 教員や看護師は学生の必要に応じてアドバイス・指導・説明をしてくれた	.516*
・ 教員や看護師の指導は具体的だった	.609**
・ 教員や看護師は一緒にケアを行ってくれた	.379**
・ 教員や看護師は患児との関係をとれるように工夫してくれた	.479**
・ 教員や看護師の子どもに対する態度から学ぶ機会が多かった	.354**
・ 学生の受け入れ体制が整っていて実習しやすかった	.360**
・ 看護師以外の医療従事者とコミュニケーションがとれた	.263*

*p<.05, **p<.01

小笠原[6]は，教員らの積極的な援助が学生自身の達成感を低くするとしている。また，千田ら[7]は，患者との人間関係の成立に限定しているが，直接に指導するよりも，実習病棟における看護のあり方のほうが，関連があると述べている。しかし，今回の結果では，『一緒にケアを行ってくれた』，『患児との関係をとれるように工夫してくれた』等が満足感と高い相関を示していた。このことは，学生は子どもへのケアに対し，教員や看護師からの積極的な援助を求めているといえる。先行研究との相違は，ケアの対象が子どもであることが要因として考えられる。40%の学生が子どもとの接触がほとんどないといった属性からも，子どもとの接し方自体がわからない学生が多くなっていると予想される。とりわけ，子どもは感情表現がストレートであるため，子どもの怒りやぐずり等の表現を学生自身に対する拒否と取り違えてしまい，子どもとの関係に戸惑うためだと思われる。

今後の指導において，子どもへの関わり方に行動レベルでのアドバイスをすることや，教員や看護師が自らモデルとなって示すこと，また子どもの行動・反応の意味を一緒に考えることで，学生自身が自信をもって子どもと接することができるようになり，満足感につながると考えられる。

先行研究[1,8,9]において，患者との人間関係が満足感に影響を及ぼしている結果がみられる。大宮ら[9]は，実習目標への到達感と満足感は相関が低く，認知領域や精神－運動領域の学習より情意領域の学習が満足感に影響を与えると述べている。今回そのような結果が得られなかった理由としては，質問内容が『子どもと非言語的コミュニケーションがとれた』，『患児の反応に合わせて関わることができた』等，子どもの性質を理解したうえでのコミュニケーション技術を要求するものが多かったことが考えられる。子どもとの関わりにおいては情意的な面に左右されると考えられるため，今後質問内容を検討する必要があろう。

今回の研究では，本学の当該年度のデータに過ぎないこと，およびデータ数が少ないことから，質問紙の信頼性，妥当性を検証するにいたらなかった。また，回収率の低さに関しては，調査項目数の多さや実習期間中に留置期間を置いたこと等が起因すると考えられる。これらについては，調査を引き続き行い，調査項目を検討し，さらに分析を深めることを今後の課題としたい。

お わ り に

今回の調査により，以下のことが明らかになった。

1. 小児看護学実習において，回答者の約70%が満足していた。
2. 本学の当該年度の実習においては，事前学習や看護過程の展開といった学習目標の達成および教員・看護師との関係や指導が小児看護学実習における満足感に影響していた。
3. 本学の当該年度の実習においては，実習以前の子どもとの接触経験や患者選定は，実習の満足感と関連はなかった。

参 考 文 献

1) 平山宗宏 (1991) “日本子ども資料年鑑 1991/92” (日本総合愛育研究所編)，中央出版，名古屋，p.13-16.
2) 石原あや，藤井真理子，鎌田佳奈美，大森裕子 (2002) 接触体験が子どもへの関心･認識に与える影響―短大生における横断的調査から―，第49回小児保健学会講演集，p.578-579.
3) 杉森みど里 (2000) “看護教育学”，医学書院，東京，p.241.
4) 桑野タイ子，宮崎和子，倉田トシ子，山口桂子，大久保富子，近藤美智子 (1987) 臨床実習教育に関する学生の意識調査 (その 1)，第18回日本看護学会集録 (看護教育)，p.89-91.
5) 山口桂子，桑野タイ子，倉田トシ子，宮崎和子，千田敏恵，大久保富子 (1988) 臨床実習教育に関する学生の意識調査 (その 5)，第19回日本看護学会集録 (看護教育)，p.62-64.
6) 小笠原みどり (1993) 看護学生の実習に対する不安の変化と満足感について，第24回日本看護学会集録 (看護教育)，p.52-55.
7) 千田敏恵，桑野タイ子，宮崎和子，倉田トシ子，山口桂子，大久保富子 (1988) 臨床実習に関する学生の意識調査 (その 6)，第19回日本看護学会集録 (看護教育)，p.82-85.
8) 山口桂子，桑野タイ子，倉田トシ子，宮崎和子，近藤美智子，千田敏恵 (1987) 臨床実習教育に関する学生の意識調査 (その 4)．愛知県立看護短期大学雑誌，19:63-69.
9) 大宮かおり，金子昌子，土屋紀子 (1995) 臨床実習における学生の満足度に影響する因子，第26回日本看護学会集録 (看護教育)，p.17-19.